

群 教 ゼ	F09 - 01
	平16.224集

# 相談室登校、不登校傾向にある 生徒への支援

- 校内組織の活性化を通して -

特別研修員 星野 洋之（沼田市立池田中学校）

## 《研究の概要》

相談室登校をする生徒や不登校傾向にある生徒及び保護者に対し、校内の教育相談委員会を中心に、学級担任・学年担当の職員、スクールカウンセラーと連携を図りながらチーム支援をしてきた。生徒と教師のコミュニケーション作りを通して、教師と生徒の信頼関係や、生徒相互の良好な人間関係を育成し充実させてきたことで、生徒を取り巻く状況が改善され、復帰が促されてきた。

【キーワード：教育相談 チーム支援 コミュニケーション プリーフセラピー】

主題設定の理由

### 家庭地域・学校の実態

- ・全校生徒が 99 名の小規模校
- ・和気あいあいとした雰囲気  
（幼稚園から小学校、中学校と同一の集団。気心が互いによく知れている）
- ・落ち着いた環境  
（地域に根付いた産業への従事者が多い。山間部に位置した静かな環境）



固定化された人間関係



家庭環境の変化（核家族化、母子家庭や父子家庭の増加 e t c . . . ）  
社会環境の変化（観光業の不振、不景気による失業者の増加 e t c . . . ）

不安定な家庭の増加



心の不安定

相談室登校や不登校傾向にある生徒が出てくる

### 課題

本校では、今まで相談室登校をする生徒や不登校傾向にある生徒が在籍しなかったことから、対応や受け入れの体制が十分に整っていない面があり、以下のような問題点が出てきた。

(1) よりよい支援体制作り

校内の教育相談委員会を十分に機能させるにはどうしたらよいか。

在籍学年を担当する担任や副担任の職員が主体的に対応し、過重な負担がかかっている。

問題を抱えている生徒の実態を把握し、共通理解を図るにはどうしたらよいか。

(2) 安心して相談できる相談場所の確保

落ち着いて相談できる場所をどこに設定するか。

職員の休養室やL.L教室の一角は教室棟から遠かったり狭かったりする。

(3) スクールカウンセラーとの連携の持ち方

担任や関係するほかの教職員と、情報交換を十分にするにはどうしたらよいか。

現状を改善していくためには、教師から生徒への働きかけはもちろんのこと、生徒とクラスメイト、教職員同士、生徒と家庭、家庭と学校などの相互の関係を密にし、生徒を取り巻く人間関係を向上させていくことが大切である。また、そのための場所や時間などの環境や支援体制も整えていかなければならない。相談室登校をする生徒や不登校傾向にある生徒に対し、それらの生徒を取り巻く支援者たちが、一つのチームとして課題を共有しながら解決にあたることが大切であると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

相談室登校をする生徒に対して

校内教育相談委員会を中心に保護者、スクールカウンセラーと協働し、組織全体で相談室登校をする生徒を支援する。

不登校傾向にある生徒に対して

校内教育相談委員会と連携をとりながら、チャンス相談やブリーフセラピーを通じて積極的に生徒とコミュニケーションをとっていく。生徒とのコミュニケーションを通して信頼関係を深め、教師と生徒の信頼関係や、生徒相互の良好な人間関係の育成を図る。

研究の内容と方法

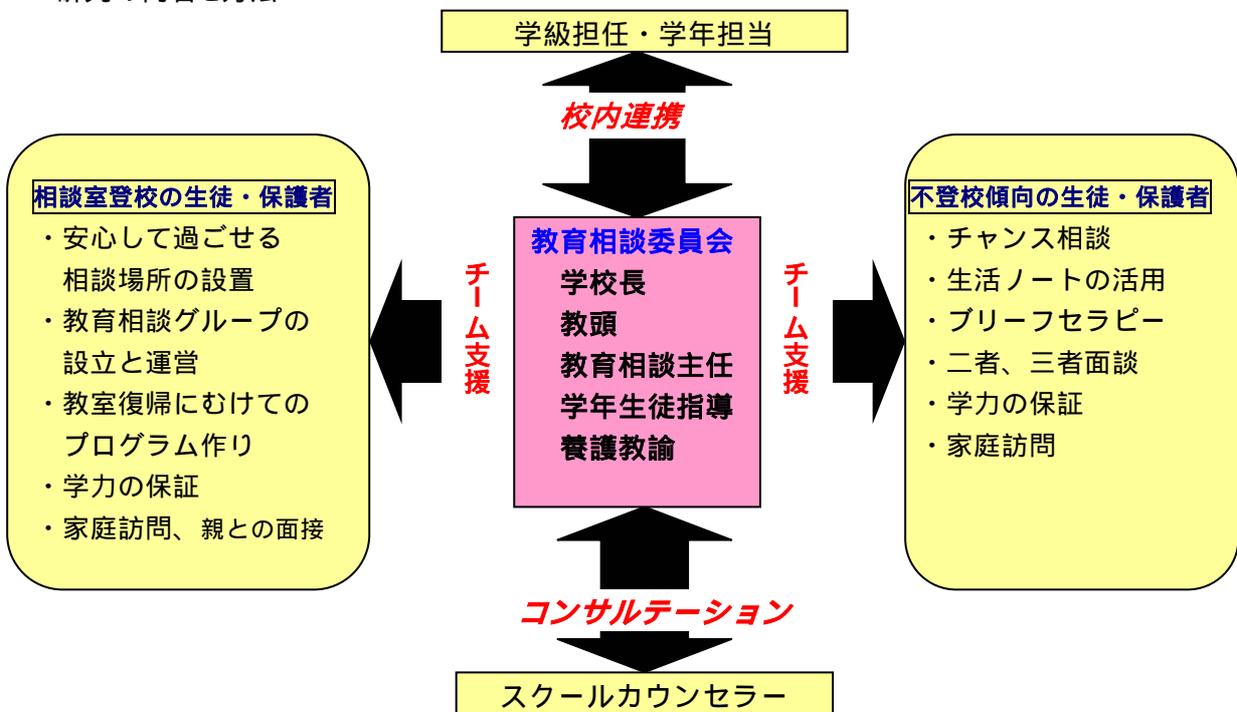


図1 校内組織の活性化

校内の教育相談委員会は、学校長、教頭、各学年の生徒指導担当、養護教諭により構成される。各学級から寄せられた情報、相談室登校や不登校傾向にある生徒に関する情報などはここで集約され、共有される。そして課題解決に向けての支援策が出され、その支援策はそれぞれの関係する援助者ともう一度検討され、支援の手立てとして実施される。このように、教育相談委員会を中心にして、同一目標に向けて組織的な取組ができるようにした。

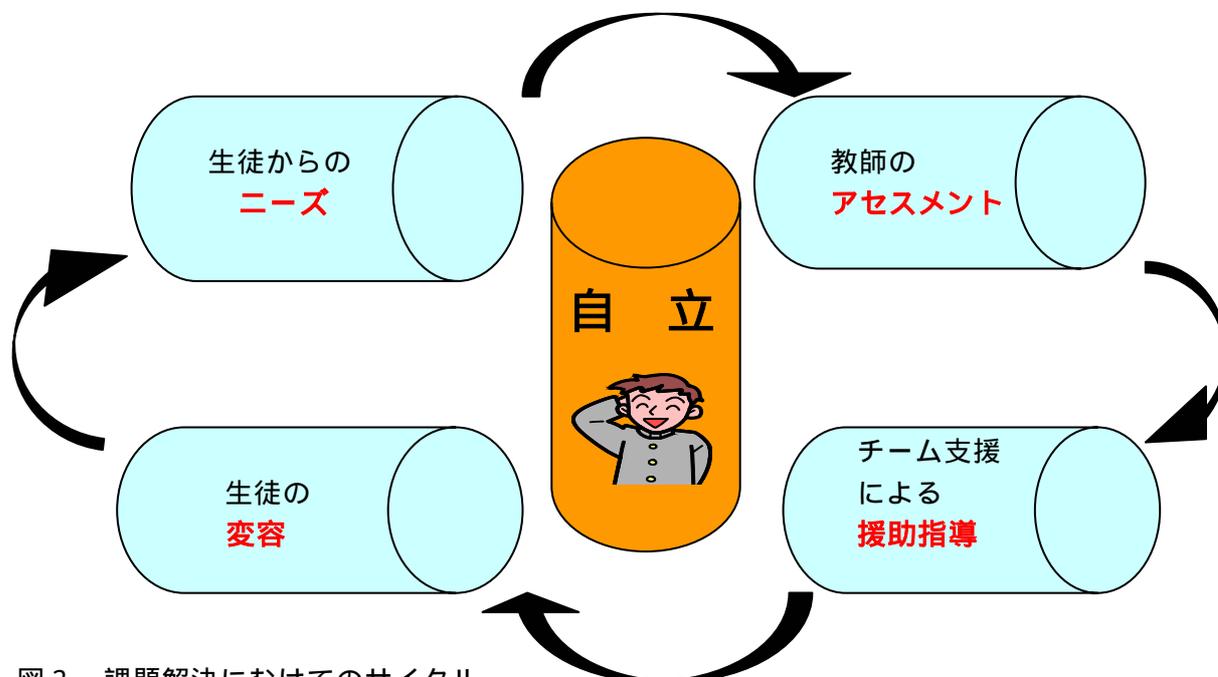


図2 課題解決にむけてのサイクル

生徒の実態から、いつ・どこで・どのような方法で支援をしていくことが有効であるかを総合的に考え、支援をしていく。手立てに対する生徒の変容を評価し、その言動から生徒の思いや願いを探り、更に組織的な支援を試みる。このサイクルの繰り返しによって、生徒が自らの力で課題を解決しようとする力が促進されると考える。

### 実践の概要

#### 1 相談室登校をする生徒への対応

目標	手立て	具体的な内容
(1) 校内組織の確立	教育相談委員会として 定期的な話し合いの実施	今まで教育相談に関する話し合いは生徒指導会議の一部に含まれていたが、十分な話し合いをするために、週に一時間の時間を確保して定期的に委員会の会議をすることになった。ここで担任や各教科の先生、生徒の家族などから得られた生徒に関する情報は、生徒の実態を把握し、生徒の願いを知るために多面的に分析された。そして、問題を抱える生徒たちの課題解決に向けて、スクールカウンセラーからのアドバイスを受けながら、十分に検討されて、次の(2)から(4)のような生徒のニーズに応じた有効な手立てがとられるようになった。今までは、相談室登校をする生徒を抱える学級担任に過重な負担がいきがちであったが、生徒を取り巻く人たちに協力をいただきながら、組織的に働きかけていくことで、担任個人の負担も軽減された。

<p>(2) 組織的な対応</p>	<p>空き時間の教員による学習当番・教科ごとの個人学習計画・連絡袋の活用</p>	<p>学年や担任対応だけでは、相談室に登校した生徒が一人で過ごす時間ができてしまうため、全教科担当職員10名で空き時間を調整しながら、相談室登校をしている生徒に対応することにした。当日の動静をみながら教育相談主任が立てた一覧表のボードを職員室の片隅に掲示した(図3)。このことにより、生徒が一人だけで過ごす時間はなくなり、いろいろな先生方とのコミュニケーションを深めることができるようになった。</p> <p>また、生徒との会話の中から「このままで高校に行けるのかなあ」などの言葉が聞かれるようになり、学習の進度に遅れをとることに不安を感じていて、「学習したい」という意欲をもっていることが分かった。そこで、担当した各教員が生徒に合った教科の補充学習ができるように学習計画を立案し実行した(図4)。</p> <p>(中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)</p> <p>また、クラスで行った授業内容が確認できるように、プリントなどの学習資料を、設置した連絡袋にいれて定期的に生徒に渡るようにした。</p> <p>これらの手立てにより、生徒は在籍学級で行われている授業の進度に合わせた補充学習ができるようになり、学習に対する不安は解消されてきた。</p>
<p>(3) S・Cとの連携</p>	<p>担当者との情報交換・指導方針の確認</p>	<p>スクールカウンセラーが来校するのは週に一度である。カウンセラーが不在の時の相談室登校の生徒の様子は、学年の担当者が記録して詳細に報告し、教育相談主任と3名で情報交換するようにした。そこで、相談委員会で話し合われた手立ては、更にカウンセラーからのアドバイスを受けて検討された。決定された指導の方針は教育相談主任が職員会議や朝会で報告し、全職員の共通理解を図るようにした。</p> <p>情報が共有されているので、家での様子などを各先生から聞かれることが少なくなり、学習態度に落ち着きがみられるようになった。また、一貫した指導方針に基づいた指導がされるため、生徒は戸惑いが少なくなった。</p>
<p>(4) 家庭との連携</p>	<p>送迎の確認・家庭訪問・面接</p>	<p>家庭に教師などが行った際には積極的に家族の人に声をかけ、情報を集めるために家庭での様子を聞いたり、家での対応について相談をしたりするようにし、連携を図ることを心がけている。</p> <p>(中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)</p>



図3 相談室登校生徒の当番表



図4 学習計画

## 2 不登校傾向生徒への働きかけ

生徒からの  
ニーズ

### (1) 生徒の実態把握

(A男)	(B子)
(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)	

### (2) 指導の手立て

#### ア 目標の設定

学校行事など学校生活の中に目標を持たせることにより、学校生活への意欲付けを図ることが大切であるという教育相談委員会やスクールカウンセラーのアドバイスがあり、学期ごとに目標の立案をした。生活面、学習面、部活動面ごとに目標を立てさせた。

(A男)	(B子)
(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)	
身近なところに目標を書いた紙を掲示し、目標を意識化させることにより、やる気を喚起できた。	目標を作った週は意欲的に部活動に参加した。

教師の  
アセスメント

#### イ 信頼関係を築くコミュニケーション

まず、生徒にとって最も身近な支援者である学級担任が信頼関係を築くことが大切であるという委員会の方針のもと、リレーション作りを心がける。夏季休業中の二者面談やテスト返却の際、休み時間や放課後、廊下や職員室であったときなども声をかけるようにし、相談機会を多くするようにした。ブリーフセラピーの手法を取り入れ、スモールステップを踏みながら意欲付けを図った。また、生活ノートなど個別にコミュニケーションがとれるものでも、毎日の提出を呼びかけ、言葉かけの工夫をするようにした。

チーム支援による  
援助指導

(A男)	(B子)
二者面談	
(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)	
ブリーフセラピー	
1回目;(略) 進路目標に向けて、1時間の家庭学習を目標にする。 2回目;(略) 3回目;(略)	1回目;(略) 入学後の希望などをイメージさせ家庭学習の継続を目標とする。 2回目;(略) 3回目;(略)
(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)	
この後、自主勉強した漢字練習のノートなどを提出するようになった。授業に集中して参加できるようになった。	回を重ねるごとに、自ら話をするようになった。目標にむかって、少しずつ達成していくことで自信がついてきた。

	生活ノート	
	(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)	
	文字は乱雑ではあるが、コメントを考えて記入するようになった。マンガやゲームの話題などでやりとりをする中で、担任との良好な関係作りができてきた。	最初は文の量も少なかったが、コメントをたくさん書いて返していくうちに、だんだん詳しく書いてくるようになった。関係作りに役立った。
	ウ 学力の保証	
欠席が多くなると、学力に支障が出てくる。授業に参加する回数が少ないために学習内容が分からなくなり、授業を難しく感じて意欲的になれず、さらに遅れをとるといった悪循環に陥りがちである。そこで、放課後学習や長期休業中の学習相談を実施して参加を呼びかけたり、欠席後には個別指導をしたりして学習に対する不安の軽減や克服を図った。		
( A 男 )		( B 子 )
(中略 詳細は、群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)		

## 結果と考察

相談室登校をしている2人の生徒に対して、教育相談委員会を中心にして教室復帰に向けての話合いや学習支援などの手立てを施していったことにより、一人の生徒は一学期途中から教室に復帰することができた。現在は、明るい表情で友達と仲良く過ごす場面も多く見られるようになった。もう1人の生徒は、毎日の呼びかけにより学校には遅れても登校し相談室で学習に取り組んでいる。

学級にいる2人の不登校傾向の生徒については、1人(A男)は家庭訪問や電話での連絡をしていく中で、家庭からの協力も得られるようになり、ほとんど休まないで登校するようになった。そして1人(B子)は少しずつ進路目標に向かって意欲的に学習にも取り組むようになって欠席も少なくなってきた。また、ブリーフセラピーを中心に、意図的に多くのコミュニケーションをとってきたことで教師との信頼関係も築けてきており、A男は家庭の悩みや進路の悩みを、B子は高校進学への悩みなどを少しずつ口にするようになってきた。

校内の教育相談委員会を中心に、多くの先生方や関係者と意見を出し合いながら改善策を模索してきたので、徹底して生徒にかかわることができた。毎日電話をかけたり、時には送迎をしたり、そして空き時間をやりくりしながら、生徒に根気強く対応していくことで生徒の状況は確実に前進してきた。今後もその生徒にとって、よりよい自立が図れるような支援を継続していくことにより、一層の効果が期待できると考える。

## まとめと今後の課題

生徒を取り巻く組織が活性化し、同一步調での一貫した指導をとることにより、多くの効果が期待できることが分かった。また、問題を抱える生徒に対し、身近な支援者としての担任が意図的・積極的に働きかけることの重要性やその方法についても考えて実践することができた。

しかし、生徒の実態を的確につかみ、必要に応じてタイミングよく有効な手立てを施していくために、まずは生徒との信頼関係をしっかりと築き、どのような思いや願いを持っているかを的確に把握した上で実態に合わせた支援をしていくことが大切であり、それが大きな課題であると感じた。個々に応じたスモールステップの計画表を立てて実践していく方法や、誰でもチーム支援をしている内容が分かるように個人シートを作成して記録をとっていく方法など、更に有効な手立てを考えながら、これからもよりよい支援ができるようにしていきたい。